

# 夏合宿 A 班 うら話

高橋俊亮(1年)

今回の合宿は いろいろと思いの多い合宿だったか、ここではあまり知られていないと思われるうら話を紹介したいと思う。

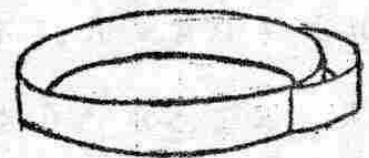
あの事件が起きたのは、弘前の駅前でチャリンコを組み立てている時だった。突然1人の若い女性が話しかけてきた。何事かと思っただ、自転車のタイヤの空気がぬけていて、それを直してほしいというのだ。ところがよく見るとムシがなくなっていて、その場で直すことはできず、近くの自転車屋まで押していくように言っただけだった。今から考えると、今回の合宿と女性とのかがわりあいは、このときすでに始まっていたのだ。しかし、この時、だれもそれを予測できなかった。

その身にみ人なを感じたのは竜飛崎だった。A班は2日後の朝に青森で小野さんと合流する予定だった。その確認のために、金谷さんは、キャンプ場から4,500m離れた所へ電話をかけた。ところがいくら待っても帰ってこないのが全員で出かけていくと、金谷さんは土産物屋の店員(高校生;もちろんな女性)と話した。この時以来全員の気持ちが変わったようだ。それから女性を求める合宿となってしまったのだ。その兆候が、最初に現われたのは、青森から佐井へ渡る船の中だった。途中の脇野沢から水着姿の女性2人が乗ってきた。この時は吉田さんと両口が佐井へ着くまでず、と話をし、星薬科大(武蔵小山の近く)

の2年生であることや、これから大間崎へ行くことなどを聞き、工大祭へ来るように言った。佐井に着いて僕たちは大間崎へ向かい、彼女たちより先に着いてずっと待っていた。しかし11くら待ってもあふられず、彼女たちとは二度と会うことはなかった。もちろん工大祭にも来なかったのだ。

次は恐山であった。そこには太鼓橋があり、それを自転車で登れるかどうかというのが問題になっていた。3人失敗した後、ついに西口が登りきった。これが一部で有名な挑戦シリーズ第一弾である。そこに2人の女性が現われ、「登れたのだから、降りれるでしょう?」と言った。そこで西口はその頃になって、太鼓橋下りが行なわれた。彼は橋を順調に降りたが、その先が砂地になっていて、そこでおしくも転倒。挑戦シリーズ第二弾は失敗に終わったのだ。もちろん彼はけがもしたかそれは無駄ではなかった。彼女はバンドエイドを取り出し、やさしくそのキズにはってくれるかと期待したが、彼に手渡しただけだった。それでも彼はそれを大事に何日間もはったままにしておいたようだ。

その後A班は予定外のコースへ進み、青森市内へ入り、ねぶた見物をすることにした。ところがそれは見物では終わらなかった。ぶらぶら歩いていると見知らぬおじさんに声をかけられ、かがシコで酒を飲ませられ、いっしょ



かがシコ

たハネらせられたのだ。その後も酔ったいまいりで、女の子たちと手をつないでハネ、地元の青年と競争してハネ、全員ハネ狂ったのだ。宿泊地と帰っても、みんなねぶたの感動が忘れられず、次の日も行こうということになった。次の日はみんなユニホームを着てい、たのだが、TITCCの文字が読めたく、地元のサイクリストが酒を飲ませてくれた。2日目も好調にスタートしたように思われたが、その日は観客が多すぎて、どうしても道のまん中へ入ってハネることができなかった。見ているだけではつまらないので、一部の観客の非難もあがるから、道の中へ入り、ついでハネることができた。もしこの日、ハネることができなければこの合宿全体がつまらないものになっていただろう。夏に青森へ行った。絶対にねぶたに参加し、ハネ狂うべしだと思った。

次の大きな出来事といえは酸ヶ湯だ。酸ヶ湯には混浴があるということかガイドブックによってわかっていたため当然のようにそこで一泊することになった。期待に反して、おばさん、おばあさん、子供しかいなかった。しかしわれわれは執念深く1時間以上もねばった。そのかいあって、大学生らしい3人が入ってきた。ところがそれまでばらばらにいたわれわれは、その時遅悪く全員が集まっていたため、彼等たちもいざつかうらしく、1人はすぐに出ていってしまった。われわれが顔を見合わせている

と、こちろも1人いなくなっていることに気がいた。金谷さんだ。どこへ行っただのかと捜してみると、存人と残りの2人の女性のすぐ近く(半径3m以内)にいる下はないか。「さすがは金谷さん、抜け目がないなあ」と言っているうちにその2人も出ていってしまった。しかし一番みじめなのは金谷さんだった。彼女たちが少しの時間はそこにいたと、そこで髪を洗っていたため、彼女たちが出ていくときには、一目も見れなかったというのだ。まことに残念な話だ。

最後の事件は十和田湖で起こった。予想通り多くの女性がいた。雨が降っていたためユースに泊った。夕食までの時間に僕と西口は乙女の像を見に、散歩に出かけた。観察力の鋭い西口はさっさと二人づれの女性を発見、ところが僕があまりのり気でなく、その場ではうまくいかなかった。しかし西口は「彼女たちはさっさとユースに泊まっているから夕食の時にチャンスだ」と言って、その期待とともにユースに帰った。西口の考え通り、彼女たちはユースに泊まっていた。そして夕食後、ついに声をかけ、トランプをやるところまでミぎつけた。しかし、その場はそれで終わり、住所、氏名ともわからず、熊本看護学校の学生であり、これから北海道へ行くことを聞かされただけだった。次の日の朝、いっしょに写真を撮ろうと、朝食後、捜したがすでにはいなかった。青森行のバスがまだ出ていなかったのも、バス停まで捜したがい、たが、

それでも見つけることはできなかった。西口はその後も彼女のこゝとをあきらめず、みんなの意見もあって、プロポーズ大作戦に応募した。テレビ局からアンケートがきたが、それ以上には発展せず再会の夢は破れてしまった。しかし西口はまたあきらめていない。彼は春合宿にかけている。九州に在ると考えているのだ。たぶん彼のコースには熊本が入るだろう。

これでこの合宿のうら話はほとんど書いたつもりだ。今回の合宿では、出来島(島では左)から見た日本海へ沈む夕日、竜飛崎から見た荒々しい津軽海峡、大間崎から見た北海道、尻屋崎での夜の海を照らす灯台と漁火、八甲田山から見た陸奥湾、発袴崎から見おろした十和田湖、と数々の美しい風景をながめてきた。しかしそれだけではやはりつまらない旅行になってしまう。ゆれわれの場合は、自転車を使っの旅であり、風景以外のものも求めるべきだし、それが本来の目的でもあるのだ。そういう点においてもこの合宿は非常に意味のあるものだったと思う。

最後にA班のメンバーを紹介しよう。

金谷さん：唯一の3年生であり、あきらめの意味でA班の中心であった。それにもまして、竜飛崎での火つけ役はみごとだった。

小野さん：おふた祭では、普段の彼からは考えられないほど、ハネ狂って全員を驚かした。

曾我部さん：おふた祭で、あまりにもかんばかりすぎて、足首を、

ネコガ、みんなを心配させたが、元気に、笠松峠、八幡平に登り、  
完走。しかし、飛荷峠ではみごとな転倒が見られた。

吉田さん：おふた祭に参加できたのは彼ののおかげ。西口とともに  
合宿全体を盛り上げた。

永見くん：「ビューンと飛んでく永見、個人行動の歌ができるほど  
の注目の人。酸ヶ湯では混浴に入らなかった唯一の人物である。

西口くん：うら話登場最多数をほこる、話題の人物。彼について  
は、もう述べることもない。

渡辺くん：おふた祭にはれこんだ男。来年は、合宿の前以後に、  
衣裳をそろえて参加するといふ声も聞かれる。

高橋：物見崎でディシーラ一故障、篝師の固定ギヤで青森まで、  
80 km以上走った。自分でもよくやっと思った。

